



マスコミ...

マスコミ論 5・25

ぎりぎり間にあった・・・寝起きだから頭痛いや...

1 この授業のねらい

今日の授業では、マス・メディアの強力効果モデルのうちの1つである「沈黙の螺旋理論」の概要を解説するとともに、その社会的背景や研究の方向性について論じる。

沈黙の螺旋理論

これはドイツで生まれた。このモデルの背景を理解するのに、日本の空気と言う話がとても有効。「お前空気読めよ！」と言うときの空気。話の流れを読めないときとか使う。空気の支配がとても大きかったのが、第二次世界大戦のころ。

2 空気の支配

・戦艦大和の最後

沖縄に行く途中に撃沈。

戦艦大和（1945年4月撃沈）最後の出撃決定を行った会議の様子

大和の出撃を無謀とする人びとにはすべて、それを無謀と断ずるに至る細かいデータ、すなわち明確な根拠がある。だが一方、（出撃を：津田）当然とする方の主張はそういったデータ乃至根拠は全くなく、その正当性の根拠は専ら『空気』なのである。…あらゆる議論は最後には『空気』できめられる。最終的決定を下し、『そうせざるを得なくしている』力を持っているのは一に『空気』であって、それ以外にない。（山本七平（1983）『「空気」の研究』文春文庫、p.16）

ちゃんとした、大和の出撃に反対していた人がいたけど、賛成している人からすれば、内部のその場の雰囲気から判断すれば、出撃させない（反対する）なんてのは考えられないということであった。

・特攻作戦の実態

・特攻作戦の実態

海軍軍令部の予測では、八機から一〇機が同時に最良の条件で命中しなければ空母や戦艦は撃墜できないこと、出撃する特攻機のうち割ていどが敵の位置に到達できるであろうことなどが、沖縄戦の時点ですでに算定されていた。そのためもあって、特攻で沈められた大型艦船は存在しなかった。…海軍航空隊パイロットの一人は、戦後に書いた回想記で、「この戦法（特攻）が全軍に伝わると、わが軍の士気は目に見えて衰えてきた。神ならぬ身である。生きる道あってこそ兵の士気は上がる。表むきは、みな、つくったような元気を装っているが、かげでは泣いている」「勝算のない上層部のやぶれかぶれの最後のあがきとしか思えなかった」と述べている。（小瀬英二（2002）『＜民主＞と＜愛国＞』新曜社、pp.32-34）

がんばって敵の戦艦を目指しても、1割しか命中しない。特攻作戦はきわめて効果が薄かった。しかし、特攻をやるべきと言う空気が内部に広がってしまうと、やめるにはやめられなくなる。みんなわかってたのに。

→対人的コミュニケーションにおける「空気を読む」ことの重視：その場にそぐわない意見

や少数意見を述べることの難しさ

その場にそぐわない意見を言うのを難しくしてしまう、と言う状況がこの「空気」の概念。

建前と本音の乖離

- ・ 建前と本音の乖離

人は「空気」により押し付けられた意見を本当に信じているのか？

言うまでもないが、天皇がただの人にすぎないことは、当時の日本人は全員がそれを知っていた。知っていたが、それを口にしないことに正義と真実があり、それを口にすれば、正義と真実がないことになる、ということも知っていた。一言でいえば、それを口にする者は非国民すなわち『日本人ではない』ということなのである。…このことが理解できなかった（捕虜）収容所のアメリカ人将校は、私が「日本にはモンキー・トライアル（進化論裁判）などなかった。われわれは進化論を当然のこととして受け入れ、小学校でも教えられ、モンキー・トライアルを不思議に思った」と言っても、絶対に信じなかったのである。（山本七平、前掲書、p.159）

進化論裁判。アメリカはキリスト教の影響が強いので、サルから進化したなんてのは抵抗が強かった。最初に進化論を教えようとした先生が裁判にかけられた。日本は現人神の思想があるから受け入れられるはずがないとアメリカ人は考えていた。しかし、日本では、現人神と進化論の思想が並存していた。すんなり受け入れた。天皇は現人神なんかじゃないってことはわかっているけど、口にはしないで、表面上信じているように見せていた。それは国の中の空気が存在するから。

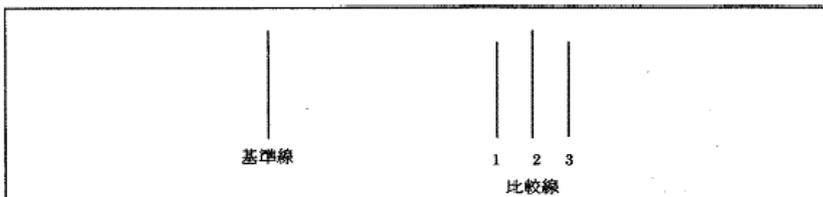
たとえば、カドミウムが公害の原因となっている間い報道に、みんな信じてしまうと、後で学者が根拠がなくて違うと言ってももう遅い。空気が出来上がっちゃってるから、ということ。

アッシュの実験。

二回目の実験にはひとつの部屋に10人集めて、回答をさせた。そのうち9人が桜。桜が間違った解答をする。つまり、被験者がちゃんとした回答をすると自分は圧倒的な少数者になると言うことになる。そのせいで、ちゃんと答えられた人と言うのは、激減したということ。

- ・ 「空気」支配は日本人に限定された現象か？

アッシュの線分判断実験（米国、1950年代初頭）による発見。



基準線と等しい長さの線は1、2、3のうちのどれか？

最初の実験では、被験者全員が正解。

しかし、次回の試験では、多くの被験者が誤った回答をした。それは何故か？

このこと（実験結果：津田）は、自分の真の利害には関連せず、またその結果がほとんど無害な課題であっても、それが明らかに誤りだと分かっているが多くの人が多数派意見に加わることを示している。トックビルのいったように『過ちよりも孤立を恐れ、多数派と同じ意見だと公言した』という現象がまさに起きているのである。（E. ノエル＝ノイマン（1993=1997）『沈黙の螺旋理論（改訂版）』ブレーン出版、p.41）

実在がないのに多数派に回らなければならないような感覚に陥る。

この「空気」が、マスコミでもあるんじゃないのと言う理論。

3 沈黙の螺旋理論とは

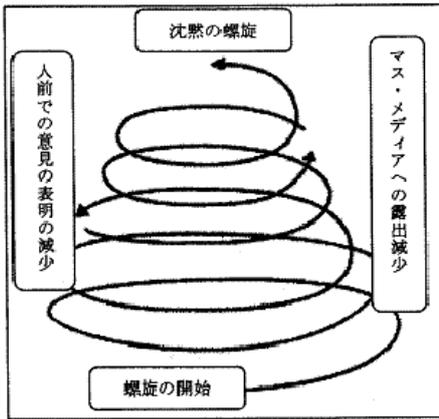
- ・ エリザベス・ノエル＝ノイマンによる「沈黙の螺旋（spiral of silence）」研究

ドイツの調査研究機関であるアレンスバッハ研究所の責任者。投票行動研究から派生。投票の間際になって投票行動を変化させる人がなぜ続出するのか、という問題。

選挙研究・・・接戦だったのに、片方が勝ってもおかしくないと思っていたのに、そっちが大敗した。その原因を研究することから始まった。

・ 意見分布のセンサーとしてのマス・メディア

人は自分の意見が多数派に属するのか、それとも少数派に属するのかをどうやって知るのか？



→現実の観察とマス・メディアを通じて、人は意見分布の状況を知る。

・ 螺旋過程の始まり

一部の人は自分の意見Aを少数派だと感じ、発言を慎むようになる→マス・メディアで意見Aが表明されることが少なくなる→より多くの意見Aの支持者が自分の意見を少数派だと感じるようになる→マス・メディアへの意見Aの登場がますます少なくなる→以下略

・ 現実の意見分布とのズレ

沈黙の螺旋効果が働くために、マス・メディア上での意見分布と現実の意見分布との間にズレが生じる。

・ 沈黙の螺旋効果を受けやすい人々

知り合いが少なく、自分に自信のない人→孤立を恐れるがゆえに、大勢につこうとする。

自分の意見が多数は少数はどっちなのかを判断する材料って何なのだろうか？

最近の例だと、一昨年の靖国神社参拝か否かが話題になってるときに、みんないろんなメディアから意見を取り入れようとする。ネットとか、おじさんの話とか。でも、他にはマスメディアも通じて意見分布を知ろうとする。

Aと言う解決策を示したい人が60%、Bが40%と示されたとすると、Bの意見の人は少数派と言う認識ができるので、なかなかBという発言をしなくなる。そうすると結果が変わってくる。70-30に。そうすると、街角でもAに同調する人が多く目立ってくる。するともっといえなくなって、最後には80-20に。つまり現実との乖離が大きくなってゆくと言うこと。

参考 選挙報道におけるバンドワゴン効果とアンダードッグ効果

政治学の領域だと似た話が出てくる。バンドワゴン効果。ある候補者が勝ちそうだという話が流れると、その候補者に票が流れるというもの。その逆は、アンダーワゴン効果、ある候補者が負けそうだといわれると、負けそうな人を応援すると言う意味で票が流れる、といもの。でも、螺旋は、人の心理状態に商店を置いているのに対して、バンドワゴン効果は選挙の制度に観点をおいている。というのは、小選挙区制だとこの効果が出やすいと言われている。その候補者が受からないと、自分の票が死表になってしまうので、自分の表を生かすために、有利な候補者に票が流れる。一方、アンダードッグ効果は中選挙区制によく現れると言われる。中選挙区制では、大きな政党は複数の候補者を立てる。そうすると、自民党はもう一人通るからもういいよね、問題は、この不利な状況にある人のほうを救ってあげたい、という考えから、そっちに投票する。こういう効果と言うのは、選挙制度との関係において、いわれてるので、まったく出発点が違うということを知ってほしい。

・ ハードコア層の存在

自分の意見が少数派だと認識していても、発言を止めない人びと（ハードコア層）が存在。

みんながみんな、この螺旋に巻き込まれてしまうのかというとそうではない。そうではない人たちをハードコア層という。自分たちの主張できるメディアと言うのは限られているので、マイナーなメディアにしか出てこない。しかし、こういう人たちが多数派の流れに歯止めをかけているということになる。こいつらがいないと、多数派の政治になってしまうということになる。

4 沈黙の螺旋理論の背景

・ メディア環境の変化

メディア環境の変化。とくにテレビの普及が大きかった。意見分布とかをテレビを通じて容易に知れるようになったし。

・ メディアの共鳴性・蓄積性・偏在性

メディアの表現内容が、画一的になってきた。多少のニュアンスの違いがあったにしても、同じようなメッセージが発信されるようになった。「限定効果」の選択的接触（自分の好みに合う情報に好んで接触しようとする）ができにくくなったのではないかとい

うこと。みんな同じ様なメッセージ。だから意見分布に反映されてくるんじゃないか？

- ・ ナチスの宣伝研究の影響？

アメリカ流のマスコミ研究の延長戦よりは、ナチスのプロパガンダ研究に端を発するのではないかということ。

5 沈黙の螺旋理論への批判

- ・ 準拠集団の存在

人が孤立を恐れるのは、準拠集団なのではないか

準拠集団。実は人は自分が多数派か少数派と言うのは、自分が所属する組織によって判断しているのではないか。準拠集団の中で孤立することを恐れる。仲間内とかさ。確か人間とは孤立を恐れるものだが、それがマスコミによってこうなるのはおかしいんじゃないの？

- ・ 孤立への恐怖というより他者への信頼なのではないか

人々が多数派のほうになびくと言うのは、孤立への恐怖なのではなく、多数派にある種の信頼があって、それゆえになびいてゆくのではないだろうか。

6 沈黙の螺旋研究の方向性

- ・ 「第三者効果」研究

マス・メディアはなぜ意見分布を知る「手がかり」として認識されるのか。

- (a) 社会の意見の反映
- (b) マス・メディアの影響力の大きさ

→人は「マス・メディアは自分には大きな影響力は及ぼさないが、他人には大きな影響力を及ぼすのではないか」と考える傾向にあるのではないか。

「第三者効果」研究

第三者効果と言うのは、沈黙の螺旋理論ではメディアで多数派の声が流されると意見分布を知ることだったが、なぜ手がかりをマスメディアで知なのか。それが社会的意見を反映しているんだろうということ、それと、メディアの影響力の大きさがある。マスメディアによって、他のみんなが影響されてしまうのではないかという考えがよぎる。

- ・ イギリス王室報道に関するインタビュー調査

話し手たちは、メディアを消費する他の人々からも、自分自身を切り離さなければならない。こうした他の消費者は、(王室に関する：津田) スキャンダラスな嘘を無批判的に信じたり、もっと悪いことにそれを読むのを望んだりすると思われ。要するに、他の人々は、騙されやすく、恥ずべき性質の人々として非難されねばならない、というわけである。(M.ピリッグ、野毛一紀訳 (1992=1994) 『イギリス王室の社会学』社会評論社、p.182)

イギリスの大衆新聞には王室の際どい報道とかするのだが(身分を偽って、お手伝いとして王室に侵入して取材したり)、その弁明と言うのは、王室のセキュリティの甘さを指摘するためにやったのだと言うようなものだった。みんなそれなりに批判的なのだが、買うのをやめるわけではない。

- ・ 「私」だけが「メディアの嘘」を見抜くことができる！？

私はマスメディアの嘘を見抜けるけど、他の人は見抜けないよね、というのが第三者効果。

似たような話に、ゲーム悪玉論・若者文化論がある。たとえば、学識があるからこのゲームの悪影響を知っているが、他の人は学識がないから悪い影響を受けるんだ。とか、これもある種の第三者効果なんだろうなあ。

メディアの長期的な効果を測定するのは難しい。類推的な影響を研究したのがないわけではない、今回はそれについて「バイオ理論」というのをやります。終わり。